

仮想通貨の謎とは

COLUMN

県内
大学発

経世済民

575

埼玉学園大学

新年早々、ビットコインが3万ドルを超えた、というニュースが入ってきた。その後は乱高下を繰り返したが一時は、4万ドルを超えた。9月には、1万がたったことを考えれば、急上昇である。数年前のビットコイン・ブームの時は、ゼミ中にスマホで値動きをチェックしている学生までいた。学生の中に成金が出た。しかし、ブームが去るとともに、すべてをなくした。ビットコイン・ブームは一過性かと思っていたら、今年またブームが来たかのようである。

ビットコインの何が魅力なのか。仮想通貨には、さまざまなタイプがある。1994年に登場した電子マネー・モンデックスはイギリスが国家的に後押しをした電子マネーであり、ロンドン郊外のスウィンドンの街が

壮大な実験場になっていた。モンデックスのカードは、クレジットカードではなく、カードの中に貨幣価値が保存されていた。さまざまな手段でモンデックスをカードにインストールし、使用することができた。これが当時としては画期的だった。今のスイカと同じである。とはいえ、日本の日立製作所の技術がイギリスで活用され、他人に直接お金を渡すことのできるシステムもあった。カードからカードへ、お年玉をあげることもできるのである。

モンデックスは、イギリスのポンドと1対1のレートでつながっていた。ポンドに付属した貨幣であった。しかし、モンデックスが、ポンドから独立し、さらには国際通貨になる可能性すらあった。しかし、その方向

奥山 忠信

経済経営学部 教授



は途絶えた。モンデックスの最大の難点は、偽造の問題であった。電子マネーが偽造されたら、本物と全く同じなのである。そのため、カードの保蔵できる額は少額であった。スイカと同じである。

ブロックチェーンのシステムによって、偽造の可能性を基本的に排除した。また、ビットコインに管理者はいない。通貨の発行額まで含めて、システムが管理している。参加は完全なオープン型である。

2019年に発表されたフェイスブックのリブラは、大きな衝撃を与えた。フェイスブックの国際的なネットワークが仮想通貨を支えると考えられたからである。しかし、リブラは各国通貨を担保に発行するシステムであり、収益が通貨発行益（シニョレッジ）から得られる仕組みであることから、各国中央銀行との軋轢があり、頓挫している。虎の尾を踏んだのである。フェイスブックに侵入される前に、中国をはじめ各国が通貨の仮想通貨化を目指している。これに対しビットコインは、

国や中央銀行による通貨の管理は人々が思っているほど信頼できるものではない。国は財政が困ればいくらでも貨幣を増発する。09年からのギリシャ通貨危機の時、ビットコインは買われまくった。国の管理よりも、システムによる管理を信じたからである。人々は、ビットコインの中に、新しい通貨管理の希望を見たのかもしれない。しかし、自由でオープンなシステムには、マネーロンダリングなどの犯罪が付きまとう。ビットコインの転落である。それでは、今のビットコインの高値は何であろうか。コロナ対策で、各国が国債を増大させてその結果、貨幣量が急増している。国の貨幣政策に関する不信が、ビットコインの高値の原因かもしれない。

おくやま・ただのぶ 東北大学経済学部卒。経済学博士（東北大学）。埼玉大学経済学部教授、上武大学学長を経て現在。著書『資本主義の原理的分析—経済学史的アプローチ—』（社会評論社、2019年）『貧困と格差—ピケティとマルクスの対話—』（社会評論社、16年）『貨幣理論の現代的課題—国際通貨の現状と展望—』（社会評論社、13年）『貨幣理論の形成と展開—価値形態論の理論史的考察—』（社会評論社、第2刷08年）『シエームズ・ステュアートの貨幣論草稿』（社会評論社、06年）